

新刊紹介

井上 真理

海老根宏、高橋和久編著『一九世紀「英国」小説の展開』

松柏社、2014年、457 + xviii 頁

本書は19世紀の「英国」、すなわちイングランドだけでなく、アイルランドとスコットランドの小説も取り上げた作家作品研究論文集である。ほぼ年代順にエッジワースから Doyle まで、幅広い世代の著者による20篇の論文が収められている。その目的は、かつてはイングランドのリアリズム小説を中心としていた英国小説研究において、近年、他地域の政治的・文化的独自性や、リアルな世界の背後にある神秘や幻想の世界への関心も高まっていることを踏まえて、19世紀のイギリス小説が現代において読まれる（べき）理由を更新することにある。結果として、本書はイギリス小説のより多様性に富む歴史的な展開を物語る一冊となっているが、中でも印象的なのは「ネーションの物語」、「アイリッシュ・ゴシック」、そして「症候学的パラダイム」の出現である。

「ネーション [民族] の物語」とは、1801年のアイルランド併合後に女性作家によって多く書かれ、物語中の風俗（とくに結婚）や小道具を用いて、アイルランドとスコットランドをイングランドと象徴的に融和させようとする物語を指す。「アイリッシュ・ゴシック」とは、アイルランドの屋敷を主な舞台とする怪奇現象を描くもので、「制限された視野による語り」を何重にも入れ子にすることで客観性を演出しつつ、個々の語りの信憑性を疑わせるという特徴をもち、世紀末にはイングランドの小説にも大きな影響を与えた。「症候学的パラダイム」とは、物事の表面の些細な徴候から、その下にあるものを真実として読み取ろうとする思考の枠組みである。これは小説の読者をも変容させ、世紀末には、その需要に応えるものとして、多くの小説に徴候的読解に支配される人物が登場した。

では、こうした 19 世紀の展開の中でコンラッドはどのように位置づけられるだろうか。コンラッドを扱った論文は二篇収められており、その一点は『闇の奥』をポストコロニアル文学の原点として読むための新たな文脈を掘り起こすもの、もう一点は『ナーシサス号の黒ん坊』の語りとその意味を 20 世紀さらには 21 世紀の大衆メディア（映画や無数のつぶやき）との関わりから論じるという斬新なものである。

西村隆「「虎の如き威厳」と「ジョン・クリーディ牧師」——コンラッド『闇の奥』と十九世紀末イギリスの言説」は、これまで知られていなかった関連文献を二点「掘り起こし」、それらとの比較から「コンラッドがどのような言説に乗り、あるいは逆らって『闇の奥』を書いたのか」（p. 322）を解き明かそうとする。

第一の文献は、『ブラックウッド』誌 1897 年 11 月号に掲載されたエドワード・A・アーヴィングによる“Tiger Majesty”という政治的な論説記事である。著者によると、この記事からは「西洋人は厳格な存在として植民地の上に君臨すべきである」という言説が抽出でき、カーツのパンフレットの一節とほぼ同じ趣旨であることがわかる。カーツがこのスローガンをも文字通り実践するべく重火器を携えて奥地に乗り込む姿には、まじめな滑稽さがあると著者は述べる。したがって、「虎の如き威厳」のような言説の再現がブラックウッドの期待したものとすると、コンラッドが書いた『闇の奥』はその「パロディ」として読めるという（p. 329）。よって、ブラックウッドとコンラッドの間には、これまで理解されてきた以上に深刻な、思想上の不和があったと著者は指摘する。

第二の文献は、『闇の奥』より数年前に書かれた「文明人のアフリカ化」を扱った代表的作品とされるグラント・アレンによる短編である。結末での女性への嘘のみならず、主人公の黒人牧師ジョンを描写する語彙に、『闇の奥』と驚くほどの類似が見られるという。ところが、マーロウはカーツが「アフリカ化」したとは一度も言わず、「異常化」したと表現する。これはカーツが帝国主義の権化になって野蛮化したことを示すものであり、ここにおいても『闇の奥』は、アレンに見られるような「黒人」は自然にかえってしまうが「白人」はどこへ行っても文明人であり続けられるという「人種の神話」を打ち砕いていると著者は解釈する（p. 337）。

日本では、帝国主義者の成れの果てのような表現も見かけるが、今でもしばしばカーツのアフリカ化はとりあえず前提されているようである。本論文は、カーツの変容についてマーロウが独自の見方をしていたことを重視するものと思われる。また、カーツのパンフレットの読み直しが行われたことにより、結末でそのパンフレットに目を通した新聞記者が「これはいいですね」とつぶやいて持ち帰る（黒原敏行訳『闇の奥』、光文社古典新訳文庫、2009年、p. 179）のは、その内容がヨーロッパの保守的な統治思想をそのまま反響させていたからであると納得できる。そうだとすると、カーツが「自分というものを忘れて」（同 p. 140）象牙掘り続けていたとマーロウが言っているのは、文明人としての自分を忘れてというよりは、もはや自律性を喪失して帝国主義の部品になっていたことを意味しているのだろうか。細部の読み直しを誘う論文である。

中井亜佐子「共同体、社会、大衆——コンラッドと「わたしたち」の時代」は、サイドにならって小説の形式分析と「世俗批評」（作品を現実から切り離さない批評）を行う。まず語りの形式分析については、近代小説の慣習から逸脱する視点の一貫しない『ナーシサス号の黒ん坊』の語りを、20世紀に本格的に作られるようになる初期映画の手法を先取りしたものとして再評価する。ジェイムズが心理的リアリズムのために一貫した「視点」を完成したのに対して、コンラッドの場合は映画がカメラの位置を変えて、自在に視聴者の見る「場面」を切り換えるのに近い。著者によると、その背景には「注意散漫」に芸術を気軽に大量消費することを望む大衆という、受け手（読者）の存在があった。

そのうえで、大衆社会の読者に「見させる」＝「連帯」を呼びかけるというコンラッドの試みが検討される。ベンヤミンによれば、大衆社会においては芸術の受容がファシズムのプロパガンダのようにきわめて政治的で危険なものになりうる。「海の子供たち」という牧歌的な表象とは裏腹に、商船という場は共同体を模倣する近代的な小大衆社会である。したがって、ナーシサス号の水夫たちの連帯が、「わたしたち」として船上の秩序を維持することもあれば、「彼ら」としてストライキや暴動未遂を起こすこともあり、しかもその構成メンバーが流動的で一貫していないことは、奇しくもベンヤミンのいう大衆の潜在的可能性と危険性の両面を物語っていると著

者は示唆する。この「わたしたち／彼ら」が最後に二人称で呼びかけられ、序文で連帯を呼びかけられる「あなたがた」に連続しているとも読めることから、著者は、コンラッドにとって読者とは「危険な群衆にもなりうる存在だが、同時に真の意味で「革命的な大衆」となることを期待される人びと」(p. 358)であったと結論する。ひるがえって、コンラッドの 2010 年代の読者である「わたしたち」大衆は、ソーシャルメディアを直接行動の原動力とし、明確な求心力なくして革命をも引き起こす可能性がある。これがコンラッド＝ベンヤミンのように言ってしまうような大衆なのかはまだ不明であるという。

コンラッドの語りが映画的であることはこれまでも論じられてきたが、本論文は、作家の意図や受容ではなく、読者の性格を歴史的に理解することから始める。そして作品外の 20 世紀的大衆の二面性と物語中の「帝国主義のプロット」(奴隷船に喩えられる商船の進行)を照らし合わせる世俗批評によって、「わたしたち」と「彼ら」の使い分けという問題に切り込んでいく。モダンな語りを分析するためには、従来の語り＝視点人物の特定に拘泥してはいけないことの証左だろう。老シングルトンとウェイトの敵対の意味や、水夫たちを連帯させる「映像的」メディアとしてのブルワー・リットン本の分析も面白い。

本書は、全体を通して 19 世紀英国小説が「リアリズム＝良識」と「ゴシック＝無意識」の相克として展開されたものであることを主張しているように思われる。19 世紀はゴシック的なものを徐々に抑圧(サブジャンル化)してゆき、それがしかし世紀末にかけて復活してくるという図式である。すなわち、1830 年代まではネーションの物語が書かれ、ピクチャレスク趣味やロマンスが下火になってゆき、1840 年代～60 年代にはヴィクトリア朝社会の現実意識や良識志向が高まり、リアリズム小説が確立される、しかし 1870 年代から症候学的パラダイムが形成され、ゴシック的なものが復活するという展開である。

すでに見たようにネーションの物語の意義は「英国」における民族間の融和にあるが、そのためには、イングランド的な良識あるいは実際的な解決が鍵となることが各論から示される。例えば、『ウェイバリー』(1814)では、イングランド出身の主人公が未知の国ハイランドでの大冒険の果て

に、地続きのロウランド人との現実的な結婚に落ち着くことが描かれる(高橋論文)。「リアリズム=良識」優位の兆しである。

ヴィクトリア時代になると、ゴシック的なものは小説のサブジャンルと化する。例えば、C・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)やエリオットの『ミドルマーチ』(1871-72)や『ダニエル・デロンダ』(1875-76)などの後期作品においては、非現実の想像は物語を展開させるための小道具や「比喩」として書きこまれるに過ぎない(大田論文、海老根論文)。ただし、アイリッシュ・ゴシックは、怪奇現象そのものを描くことで生き残った。それはアングロ・アイリッシュ地主たちの政治的・経済的立場の不安定という現実と根差していたことや、客観性を担保する語りに助けられたと考えられる(桃尾論文)。

ゴシック的なものの復活は、メレディスという意外な作家に遡ることができるという。メレディスは1859年に早くも無意識の徴候に悩まされる主人公を描いた(丹治[竜郎]論文)。その後、読者に浸透したメレディス的な自律性の喪失と、世紀末にかけて起こったさまざまな「人間と世界についての根拠の喪失」(p. xii)が、非日常のゴシック的世界が前景化する小説を生んだとされる。ドイルに至っては、ついに未知の異世界(霧のロンドン)にばかりと浮かぶ島のような日常世界(221番地のB)という象徴的な反転が起こる(山田論文)。

こうした文脈の中にコンラッドを置いてみると、ほとんどが「未知／未開の国」での「徴候的読解」の物語であり、読者にも観察的な視線が要求されることが、歴史的に理解できる。『闇の奥』においても、生首の展示や部族の集まりへの参加が「アフリカ化」への徴候と読まれてきたし、『ナーシサス号の黒ん坊』においても、風による船の遅延を病人の超自然的な抵抗の表れと語ることは、本書の展開に照らしてみれば、この時期の症候学的パラダイムに合致する要素と読むことができるかもしれない。そうであるとすれば、西村・中井の両論文はマーロウの現実的な見方や、「海の子供たち」が近代的な大衆であることを指摘することで、このようなパラダイムから作品と読者を解放する試みと言えるのではないか。